

質的心理学における方法論的議論に関する一考察

——グラウンデッド・セオリー・アプローチの観点から——

儘田 徹

Consideration of a Methodological Discussion in Qualitative Psychology from a Grounded Theory Perspective

Toru Mamada

本稿では、質的アプローチの方法論の発展・深化に資するべく、質的心理学におけるやまだようこの一連の議論とそれに対する大倉得史の論点を、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA）の観点から批判的に検討した。大倉の論点は多岐にわたるため、本稿ではそのうちの「客観主義」に焦点をあてて議論を展開した。この論点に関する大倉の主な主張は、語られた言葉という客観的外部資料により検証可能な仮説をめざすやまだらの姿勢を、「客観主義」として批判するというものだった。これに対して筆者は、語られた言葉の取りうる意味による仮説検証は可能であることを、大倉による分析例の問題点や筆者によるGTAを用いた分析例を示しつつ論じた。また、言葉の取りうる意味へのこだわりがGTAの方法論の特徴の一つであり、これによって研究者の直観の飛躍が抑制される可能性があることを指摘した。

キーワード：方法論，質的心理学，グラウンデッド・セオリー・アプローチ

I. はじめに

近年、質的心理学と呼ばれる領域における研究活動が活発化しているようである。2002年に学会誌『質的心理学研究』が創刊されたことも、その証左の一つといえるだろう。

その創刊号について、質的心理学の本質的意義を現象学的発想に求め、自ら「語り合い法」という方法論を提唱する大倉得史¹⁾は、質的心理学を推進する研究者の間で、現象的発想が必ずしも共有されているわけではないことが明らかになったと指摘する。そして、質的心理学の代表的研究者の一人であるやまだようこの論文²⁾を発端として、『質的心理学研究』を中心に展開された一連の議論を批判的に検討することで、自らの語り合い法の方法論がどのようなものであるかを明示しようとする³⁾。

この問題意識は大倉の著書の一つの章で提起されたも

のではあるが、それ以外の多くの章でも、量的、自然科学的アプローチを含む幅広い方法論的立場との対比によって、語り合い法の方法論を明確化する試みが展開されている。量的アプローチと質的アプローチの方法論的異同に関心を持つ筆者にとって、そうした大倉の試みはきわめて魅力的にみえる。しかし大倉と異なり、質的アプローチの中で筆者自身が基本的に与するのは、A. ストラウスらのグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA）であり⁴⁾⁵⁾、おそらくそれゆえに、大倉の議論の内容には違和感を覚える部分も多い。

そこで本稿では、質的アプローチの方法論の発展・深化に資するべく、やまだらの一連の議論とそれに対する大倉の論点を、GTAの観点から批判的に検討することにしたい。

II. やまだらの議論の経緯

議論の発端となった論文²⁾において、やまだはまず、小津安二郎監督の映画「東京物語」の一シーンと、ヒーローを亡くした若い女性ファンの語りを事例として、生と死の亀裂、連続性と不連続性、日常と非日常の断絶、生のエネルギーを強く感じさせる天気（夏の暑さ、良い天気）、日常生活を通常どおり続けている他者と、死に直面した当事者である（死者の側にいる）自己との亀裂が語られていることが、両者に共通すると指摘する。

続いて、これを死にゆくがん患者の語りの事例と照合させ、連続性と不連続性、存在と不在、自己と他者、長い自然サイクルと短い人生サイクルの裂け目といった生と死の亀裂が共通することを確認し、さらに中原中也の母親の語りと中也の詩という事例から、そうした亀裂にもなう罪悪感や喪失感を読み取っている。

そして、こうした分析の結果として、次の3つの仮説を提起する。

- ①他者の死を見送る時、自己が死ぬ時にかかわらず、生死のぎりぎりの境界で天気の語りが現れるのは、偶然ではなさそうである
- ②その語りは、日常と非日常、連続性と非連続性、人間と自然、生者と死者、自己と他者など、多重の関係性の亀裂を意味するだろう
- ③生死の境界の語りの組織的分析は、日常生活の心理的現実を生きたかたちで探求する方法として有効だろう

このやまだの論文について、西條剛央⁶⁾はやまだの方法では仮説③でいう「心理的現実」に迫るには不十分として、「一方では外部的視点を保ち、もう一方では語りの中に入り込むといった二重性に身を置きつつ、徹底的に言語化・分析する」ため、語り手が「(1)どのような心理状況で、(2)何を、(3)どのように感じ取ったために、そのような言及をしたのかを分析・考察する」⁷⁾という方法を提唱する。そして、上記のやまだの3仮説を山頭火の日記・俳句、山田詠美の小説、宮沢賢治の詩・短歌、手塚治虫の漫画、中原中也の詩という新たな事例と照合し、おおむね仮説が支持されることを確認した。

さらに、仮説①について、生死の境界で語られるのは「天気」に限局されないこと、仮説②について、「多重の関係性の亀裂を意味する」という記述を検証可能なものとする必要があること、仮説③について、自らが提唱した方法により「心理的現実」に接近しえたことを指摘し、

次のような修正仮説を提示した。

- ①親しい他者や自己の死に直面した際、「うつくしい・あかるい・晴れやかな」生のエネルギーを感じさせる「自然・天気・季節」の語りが現れることがある
- ②親しい他者や自己の死に直面した時、感受性が高まり、死とは対照的な「自然現象のうつくしさ・あかるさ・晴れやかさ」を敏感に感じ取った結果、「天気・自然・季節」に関連づけてそれらに言及されることがある
- ③語り手の視点に立ちつつ、生死の境界における語りの組織的分析を行うことは、日常生活の心理的現実を生きたかたちで探求する方法として有効である

さらに、これらの修正仮説を上述のやまだが用いた映画などの事例と照合し、それらによっても修正仮説が支持されることを確認している。

この西條の修正仮説について、やまだ⁸⁾は「修正仮説が『天気・自然・季節』にまで拡張されると、おりおりの心理的感慨を自然にたくして詠う伝統をもつ日本の詩歌の大部分がそのなかに含まれてしまい議論が拡散していく怖れがある」として、「限定された領域で、限定された目的に対して、限定された用語で構成される検証可能な仮説」⁹⁾の提示をめぐす必要性を指摘する。

そして、西條が論じているように「分析の途上において、外側からの形式的な分析に終わらず、語り手の心情に深く入り込んで、そこにどのような心理的アクチュアリティが生起しているかを推測を含めて考察することはたいへん重要」としながらも、「そこで起きていると推測される心理的アクチュアリティを研究者として『言語化』『記述』『モデル化』『仮説』にするときには、感情移入や解釈による用語を極力排して、できるだけ外部的、形式的、公共的、操作的に検証できるように、平明で誤解の少ない記述方法にしていくことが必要」¹⁰⁾なこと、「再現性 (replication) は科学の基本であり、〔中略〕分析途上では、研究者の解釈や語り手の心情の推測を行っても、分析結果や仮説については、客観的に事実関係を規定できる用語で記述し、その推測が妥当であることを証明できる外部的証拠を出していくことが必要」¹¹⁾なことを強調している。

また、「数が多ければ心理的現実の真実をより反映しているとか、信頼性が高い」とはいえず、「数の多さよりも、質のうえで典型性・代表性 (representative) をもつ語り事例を選ぶことが必要」¹⁰⁾として、「組織的事例選択」というサンプリング法を提唱する。

そしてこの方法により、自分の母親という同一人物の

死について、「死の接近」「生死の境界」「死後」という異なる3状況において詠まれた齋藤茂吉の短歌、同じく齋藤茂吉の短歌で、恩師、医師でもある自分の患者など異なる人物の死について、同様の3状況において詠まれたもの、さらにこれら以外の典型事例としてがんで亡くなった医師の手記と宮沢賢治の詩、反証事例として柳田邦男のノンフィクション作品を選択し、これらの事例を検討のうえ次のような再修正仮説①と関連仮説②③を導いている。

- ①親しい他者の死、自己の死にかかわらず、生死のぎりぎりの境界で、明るい天空や天気の話りが現れることがある
- ②親しい他者や自己の死に接近すると、対照的に他の生き物とのつながりや自然の生命力が語られるのではないか
- ③親しい他者の死後は、追憶による喪失感や時間の推移が語られるのではないか

こうしたやまだと西條のやりとりについて、菅村玄二¹²⁾は実験心理学の立場から批判的論評を行った。菅村の批判は主に、やまだらの「仮説」や「検証」の概念と、サンプリング法に向けられていると考えることができる。

まず「仮説」の概念について菅村は、西條の仮説には事実だけでなく解釈や考察が混在しており、これらを区別すべきとのやまだの提案を支持する¹³⁾。しかし、やまだの再修正仮説にも「生死のぎりぎり」のような、事実にもとづかない表現が含まれており、検証可能な仮説とはほど遠いと指摘する。つまり、やまだは事実により検証可能な仮説をめざすと主張しつつも、それを実現できていないというのである。

次に「検証」の概念については、やまだらが「検証」と呼んでいるものは「例証」にすぎず、「いくら例証事例を増やしても、仮説の妥当性は論理的に保証されない」¹⁴⁾と述べている。この批判の背景には、「検証」は大量データにもとづく統計的検定によってのみ達成されるという立場がある。

サンプリング法については、菅村はやまだが提唱する「組織的事例選択」というサンプリング法を批判する。「[やまだの]仮説を検証するならば、統制期間、また統制群をおくことが必要である。[中略]『死の接近』、『生死の境界』、『死後』[という区分は]統制期間的な役割を果たしているが、「死の接近を自覚する以前で天気への話りが見られるかどうか、組織的な分析対象にしたほ

うがよい」¹⁵⁾というのである。また、やまだが「重要な心理学的現実」を含む事例という理由で、齋藤茂吉の短歌や宮沢賢治の詩を選択していることについて、この理由はやまだの推論にすぎず、「予備調査によって確証される必要がある」¹⁶⁾と指摘している。

以上がやまだらの議論のざっばな経緯だが、冒頭で述べたように大倉はこの一連の議論を土台に独自の方法的な試みを展開している。それらに含まれる論点は多岐にわたるが、本稿では冒頭で述べた筆者自身の関心および紙数の関係で「客観主義」のみを扱い、その他については稿を改めて論じることにしたい。

Ⅲ. 「客観主義」をめぐる

やまだらに対する大倉の批判の根底には、語り手の体験世界には言語化可能な社会的・公共的な部分と、言語化不可能な私的な部分があり¹⁶⁾、後者の探究こそが質的心理学の本来の課題でなければならないという考え方がある。にもかかわらず、やまだらは逐語録を語り手の体験世界の再現とする新たな素朴実在論にもとづいて、逐語録に登場する言葉を「仮説」の根拠とするという新たな客観主義に陥っており¹⁷⁾、このことが質的心理学の本来の課題の実現を阻んでいる。そしてその結果、やまだが最終的に提出した再修正仮説は、「質的研究のエッセンス(「意味」)を取り除いた亡骸のようなもの」¹⁸⁾となってしまっている。

ここでいう「質的研究のエッセンス」こそが語り手の体験世界の私的部分であり、これに迫るために大倉が考案したのが先述の語り合い法である。この語り合い法的な直観の意味把握をやまだも無自覚的に行っているのだが、新たな素朴実在論・客観主義への固執ゆえに、これを十分に展開できない中途半端な状態に留まっているというのが、大倉のもっとも主張したいことのようなだ。

こうした言葉[「きれいな夜明け」「良い天気」「みぞれ」「夕日」「星のゐる夜空」「赤光」「赤赤」「すきとおる」]を客観的に見比べてみたときに、読者は直ちにこれらに共通する何らかの明確な同一性を見出せるだろうか。[中略] テキストを織り成す言葉一つひとつの意味というのは、テキスト全体が伝えようとしているある感動や体験の直観的な了解に基づいて決定されるのであって、その逆ではない。[中略] やまだが「きれいな夜明け」「みぞれ」「赤赤」といった言葉に一定の同一

性を見出し得たのは、まず何よりもテキストが伝えてくる全体的な感動や体験を彼女が感覚的に了解し、そこに通底する何らかの同一性を見て取ったからこそ可能になるのであって、これらの言葉それ自体に、そもそも客観的に、そういう同一性があったというわけでは決してないのだ¹⁹⁾。

しかし、この部分の冒頭の問題提起を冷静に読み返したとき、たいいていの読者は違和感を覚えるのではないか。というのは、1「きれいな夜明け」、2「良い天気」、3「みぞれ」、4「夕日」、5「星のある夜空」、6「赤光」、7「赤赤」、8「すきとおる」のうち、1～5が「天空・天気」を意味するということには、言葉の通常の意味からみて何の無理もないと感じられるからだ。また、6が夕日の光を意味することがわかってさえいれば、これについても問題はないといえよう。

一方、7と8はどうみても無理がある。しかし、7を含む事例は5が、8を含む事例は「お日さま」という言葉が出てくるので、すべての事例が「天空・天気」を意味する言葉を含んでいると主張することに問題はなさそうである。つまり、大倉のいう「テキストが伝えてくる全体的な感動や体験」でなくても、常識的な直観程度のものでそれらの同一性を見出すことは可能と考えられるのである。

このような、やまだを含む大方の人が共有していると思われる常識的な直観にもとづいて、「きれいな夜明け」「良い天気」といった言葉の意味を文脈の中で検討し、意味に同一性が感じられる一連の言葉を包摂できる概念を探し求め、「天空・天気」という概念を見出したというのが、やまだが実際に行った分析だったのではないだろうか。そうであるなら、大倉が「客観主義」として批判する「客観的」「外部」資料としての言葉という前提も、一定の説得力があるように思われる。

先ほど、「赤赤」や「すきとおる」といった言葉が「天空・天気」を意味するという主張には、無理があることを指摘した。言葉が特定の意味を持つか否かについて、このように「無理がない/ある」の何らかの境界があるとすれば、そのような境界が分析の恣意性のある程度は制約する可能性があるのではないか。「客観的」「外部」資料としての言葉ということが、こうした境界による研究の恣意性の抑制を意味するのであれば、「客観的」「外部」という用語はさておくとして、主張としては間違っていないといえそうである。

また、文学作品ではなくインタビューの場合には、語られた内容だけでなくその場で観察された身振りや口調、印象や雰囲気などについても、しばしばデータとして記録される。そして、言葉の意味を検討する際に言葉の取りうる意味を絞り込むため、こうしたデータは文脈の一部として利用されている。この点で、逐語録だけが分析の客観的外部資料とされているかのごとき大倉の議論は、逐語録分析の一部については問題ないのかもしれないが、その全般にあてはまるものとは思えない。

以上が大倉のいう「客観主義」に関する筆者なりの考え方であるが、その前提となる「素朴实在論」についてもここで論じておくことにしよう。

大倉のいう「素朴实在論」とは、逐語録は語り手の体験世界を再現したものという考え方のことだった。この考え方は、桜井厚のいうライフストーリー研究における「解釈的客観主義アプローチ」と合致する²⁰⁾。

ライフストーリーとは、「個人が生活史上で体験した出来事やその経験についての語り」²¹⁾のことだが、「この〔解釈的客観主義〕アプローチでは、制度的、規範的現実があらかじめ存在することがライフストーリー成立の前提とされている」²²⁾。そしてそれゆえに、一定数のライフストーリーを集めてその内容を重ね合わせていけば、それらに通底する社会的現実に向ることが可能とされる。

こうした解釈的客観主義アプローチに対し、「対話的構築主義」と呼ばれるアプローチは、「語られたことが体験されたことや起きた出来事を表象している」²³⁾といった素朴な見方とは、一線を画している。

体験された過去の出来事は、口述/記述される場合には、言語的形式の制約を受けて表象される。つまり、過去に体験された出来事は、言葉によって語られることによって、その場でつくられる。そのうえ、語りには現在の語り手の動機も作用する。語り手はインタビューの場で語りを生産する演技者であって、十分に聴衆(インタビュアー、世間など)を意識して語るのである²³⁾。

そのような語り手の語りに大きく影響するのが、桜井のいう「モデル・ストーリー」である。「モデル・ストーリー」とは、集団ないしコミュニティレベルで流通し、人々が何らかの現実を語ろうとするときに、語り方のモデルとして引用・参照されるストーリーである²⁴⁾。さらにこれとは別に、全体社会の支配的文化において語られるストーリーを「マスター・ナラティブ」と呼ぶ²⁵⁾。

こうした観点に立てば、逐語録は尋ねられたことについて語られた語り手の体験そのものではなく、素朴実在論という批判はあたらなくなる。また、逐語録は語り手の体験と関連があるとしても、モデル・ストーリーやマスター・ナラティブに沿ったストーリーや、そうしたストーリーに回収されない新たなストーリーを含む、語られたストーリーの複合体とでもいうべきものとなる。とすれば、逐語録の分析によって可能なのは、語られたストーリーの理論的モデルを構築することだと考えたほうがよさそうである。そして、そうした理論的モデルを構築することで、一定の体験に関連づけられた一群のマスター・ナラティブ、モデル・ストーリー、新たなストーリー、あるいはそれらの関係性が、より多くの人に気づかれやすくなるのだ。

IV. 語り合い法による分析例とGTAのコーディング法による分析例

大倉¹⁾は自らの語り合い法の特徴を明示するため、やまだらが扱った事例の中から宮沢賢治の詩と齋藤茂吉の短歌を取りあげて分析を行った。以下ではそれにならって、GTAのコーディング法の特徴を明示すべく、大倉による分析例と、同じ事例を用いたGTAのコーディング法による分析例を比較検討することとしたい。そこでまず、大倉の分析結果の中心部分を引用する。

生と死の境で、私たちは〈光〉——みぞれの、炎の、星空の、太陽の——に触れる。生と死を隔てる暗くて

深い谷のような闇と絶望と断絶に、ときにはみぞれや星空の優しい光が、ときにはエネルギーに満ちた太陽の光が差し込み、すべてを包む。優しい光は形なき生命でもあろうし、言葉なき語りいでもあろう。柔らかな光によって、私たちは死者と対話し、死者と共に超時間的なひとときを過ごすのだ。死者もまた同じく、光として、生の世界の者たちと共にあろうとするのだろう。そうした日常を超えた二者の世界に、やがて太陽のざらざらした光線が差し込むとき、生者と死者の語らいは終わり、それぞれが自らの居場所——日常——へと戻っていく。太陽の光の中に、弱くて柔かい光が溶け消え、常にそこにあるのに決して見えないもの、存在なき存在へと再び還っていくのだ。²⁶⁾

分析結果の引用文の冒頭において大倉は、生死の境で経験される光として、みぞれ、炎、星空、太陽を並列している。しかし筆者には、「へんにあかるい」と表現されるみぞれや、お骨を拾うという現実的な場面を遍く照らす太陽と、夜の闇の中にともる炎や「いつくしき」とも表現される星空の間には、大きな相違があるように思われてならない。大倉自身も、太陽の強い光の異質性には気づいているようだが、それをうまく整理できていない。また大倉は、弱い光の中で生者と死者が対話することをくり返し記述しているが、なぜそのようにいえるのかについての説明は見当たらない。

次に、GTAのコーディング法による分析で見出された概念間の関係(図1、「」はカテゴリーないしサブカ

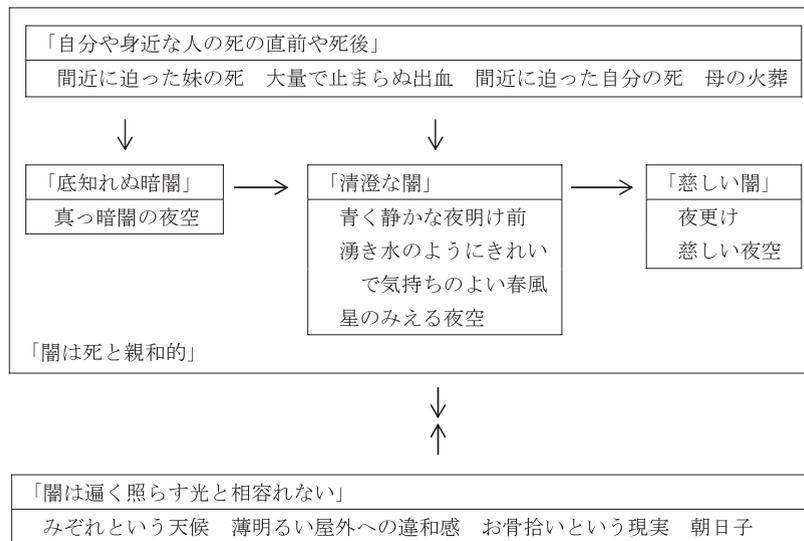


図1 概念間の関係

テゴリー, 一方向の矢印の先は帰結, ぶつかり合う矢印は対立を意味する), およびストーリーラインを示す。

「自分や身近な人の死の直前や死後」においては, 闇は最初は「底知れぬ暗闇」と感じられる場合もあるが, 次第に「清澄な闇」と感じられるようになり, 「慈しい闇」と感じられることさえある。このように「闇は死と親和的」だが, 「闇は遍く照らす光と相容れない」。

こうして大倉と筆者の分析結果を並べてみると, 焦点となっているのが大倉の場合は「光」, 筆者の場合は「闇」ということで, 大きく異なっていることがわかる。この差異は, みぞれ, 炎, 星空, 太陽という言葉がそれぞれの文脈において取りうる意味に, こだわるか否かによって生じたように思われる。研究者はそうしたこだわりによって, 自らの直観が飛躍してしまうのを多少とも抑制できるのではないか。そしてここにこそ, 言葉をデータとして扱う意義があるのではないか。大倉が, 太陽という言葉の取りうる文脈の意味としての遍く照らす光にこだわることができているならば, 炎や星のような局所的な光の地としての闇の重要性に気づいたり, 自身の仮説をより整合的なものにできたように思えてならない。

そこで, 質的アプローチとしてのGTAの方法論的特徴の一つが, 言葉の取りうる文脈的な意味へのこだわりであり, これによって研究者の直観の飛躍が抑制される可能性があることを指摘して, ひとまず本稿を閉じることにしたい。

文 献

- 1) 大倉得史: 語り合う質的心理学—体験に寄り添う知を求めて—。ナカニシヤ出版, 2008。
- 2) やまだようこ: いのちと人生の物語—生死の境界と天気の語り—。やまだようこ, サトウタツヤ, 南博文(編): カタログ現場心理学—表現の冒険—。金子書房, 2001: 4-11。
- 3) 文献1: 36-37。
- 4) A. ストラウス, J. コービン, 操華子, 森岡嵩(訳): 質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順—, 第2版。医学書院, 2004。
- 5) 戈木クレイグヒル滋子: グラウンデッド・セオリー・アプローチ—理論を生みだすまで—。新曜社, 2006。
- 6) 西條剛央: 生死の境界と「自然・天気・季節」の語り—「仮説継承型ライフストーリー研究」のモデル提示—。質的心理学研究, 1, 2002: 55-69。
- 7) 文献6: 57。
- 8) やまだようこ: なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか?—質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承的サイクル—。質的心理学研究, 1, 2002: 70-87。
- 9) 文献8: 72。
- 10) 文献8: 74。
- 11) 文献8: 75。〔 〕は筆者。
- 12) 菅村玄二: 生死の境界での語り—実験心理学から見た質的心理学—。質的心理学研究, 2, 2003: 150-158。
- 13) 文献12: 155。
- 14) 文献12: 152。
- 15) 文献12: 153。〔 〕は筆者。
- 16) 文献1: 33。
- 17) 文献1: 9, 22-23, 44。
- 18) 文献1: 43。
- 19) 文献1: 44-45。〔 〕は筆者。
- 20) 桜井厚, 小林多寿子(編著): ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門—。せりか書房, 2005。
- 21) 文献20: 12。
- 22) 文献20: 30。〔 〕は筆者。
- 23) 文献20: 38。
- 24) 文献20: 175。
- 25) 文献20: 178。
- 26) 文献1: 53。